



土木デザイン設計競技「景観開花。」

われわれはエンドユーザーとして「土木」の恩恵を受けて日常生活を送っている。また、多くの読者は学問や仕事の対象として「土木」に携わっているだろう。当たり前のようにわれわれの日常にある「土木」だが、休日にもその「ドボク」に取り組む人がいる。課外活動や趣味として「休日ドボク」に取り組む魅力はどこにあるのか。その人たちの想いを知ること、土木の新たな魅力を発見したい。「休日ドボク」第1回の今回は、土木デザイン設計競技「景観開花。」に携わる学生の声を紹介し、その魅力に迫る。

「景観開花。」とは

「景観開花。」は、学生および若手社会人を対象とした土木デザインの設計競技である。東北大学景観研究室が主催するこの設計競技は2013年に第10回を迎えた。毎年さまざまな設計

テーマが与えられ、東日本大震災後3年度となる「景観開花。X」では、「未来へつなぐ防災まちづくりデザイン」の設計テーマのもと、全国から東北へ19作品が集まった。設計競技の目的は「土木デザインに関心を持つ若者へ、その力を試す場を提供すること」、「多くの

人々へ、土木デザインの可能性を示すこと」とされており、例年通り最終審査会が一般に公開された。

はじめての設計競技

— ビジョンが見えない大変さ —

最優秀賞を受賞したのは富山大学



写真1 富山大学のチームの作品「祭りに誘われて」。低層の建物が立ち並ぶ地区の津波防災を考えたまちづくり。各町の所有する曳山の保管庫が津波避難施設として利用され(写真中央下)、その曳山の巡行路が津波発生時の避難経路となる。



写真2 富山大学のチームのみなさん(左から堀さん、野中さん、大島さん、宮崎さん)

芸術文化学部の野中美和さん、大島堅太さん、宮崎和也さん、堀昭仁さんのチーム。射水市新湊地区のまちづくりと津波防災に、「祭り」をからめた作品「祭りに誘われて」は審査委員から高い評価を得た。大学の教員からの呼びかけで設計競技に参加することとなり、提案された設計競技の

中から「まちづくり」をテーマとしている「景観開花。」に興味を持った。これまで授業でも勉強してきた大学周辺のまちづくりを考えてみようと思ったという。建築を専攻する学生であるが、「土木の設計競技」という意識は特にしておらず、まちづくりは建築と土木の融合分野だと考えているとのこと。設計競技に参加するまで、防災について考える機会がなかったという野中さんは、「誰も教えてくれないから、何が正解かわからない。話し合せて答えを出していく感じは授業とは違うと感じた。防災について考える良いきっかけになった」と話してくれた。初めての設計競技は完成までのビジョンが描けずうまく計画を立てることができずに苦労したという。想像していたよりも大変で、締切が近づくにつれて作業時間を増やさなければならなかったそうだ。講評会の後には、「講評やほかのチームの発表をみて、自分たちは詰めるところをちゃんと詰めきれいでいなかったと感じた。良い経験になった」と刺激を受けた様子だった。宮崎さんが感じる設計競技の魅力は「自分でつくった作品を学外の人に評価してもらええる」点だという。所属大学や土木建築の枠にと

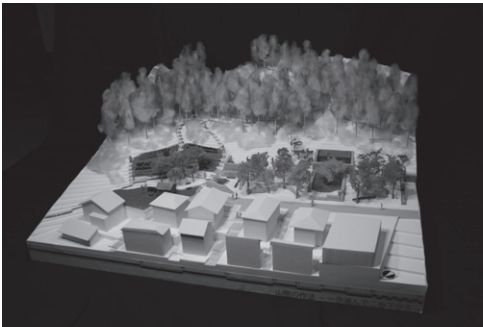


写真3 東京大学のチームの作品「山際の作法～一歩進んで二歩下がる～」。山を手入れすることにより斜面防災を実現し(＝一歩進んで)、長期的にはより安全な平地に住み替える(＝二歩下がる)という山と人の関係を整える方法が提案された。

らわれず、普段接することのない人と
の交流も設計競技の魅力の一つだろう。
「景観開花。」を含む設計競技に、今
後も参加したいかとの質問には、少し
考えてから「挑戦できたらしてみたい」
と答えた野中さん。楽しかった・よい
経験になったという感情と制作の過程
にあった苦労とが交錯しているような
間違った。作品完成までの道のりは苦
労が多いように思えるが、「模型をつく
るなどの細かい作業は純粋に楽しかつ
た」と前向きに取り組んでいた様子も
うかがえた。

マラソンのような魅力

—しんどさの先にあるもの—

優秀賞を受賞したのは、東京大学お

よび同大学院の浅井淳平さん、有田昌
弘さん、山崎明日香さん、宮坂知成さん
のチーム。「大学には真剣に議論する場
があまりないと思う」という浅井さん
は、設計競技に参加することで、「自分
でものや形、アイデアを出す楽しさ
や、考えがぶつかりあう楽しさ」を感じ
られるという。宮坂さんは「ゴールがな
いからこそ楽しい、やればやるほど楽
しい」と話す。納得できるまで突き詰め
るからこそ得られる楽しさは、「休日ド
ボク」ならではだろうか。斜面防災とま
ちづくり・時間とともに変化していく
自然と人の関係の提案として高い評価
を受けた「山際の作法」一歩進んで二
歩下がる」からは、綿密な議論が重ね
られたことが伝わった。

設計競技に初めて参加し、

形が出ないときの「しんど
さ」を実感したという山崎
さん。しかし、みんなで真剣
に議論し「しんどさ」を乗り
越えて形が出たときに「楽し
さ」を感じたという。辛い思
いをしながらも休日返上・徹
夜で取り組むモチベーション
はどこから来るのか。設計競
技を「マラソンのよう」だと

例えた宮坂さんは、「辛くても
終わった後はまた参加したい
と思う」とその魅力を語った。
「勉強して本を読むだけで終
わっていたが、実際にものを見
て具体的な対応策を考えると
いうことをやってみたかった」と
いう有田さんは、「自分がやれる
こととやれないことは何だろう
とか、何が向いているのかを考
える良い機会になった」と振り
返った。就職活動など、今後自
分は何をやるのかを決めていく
際の「指標」になるという。最終審査会
での講評を経て、「自分の考えを社会に
提案したことで、何が足りないのかを
知ることができた」と話す浅井さんや、
「強弱の付け方や見せ方の訓練になっ
た」という宮坂さん。それぞれに設計競
技を通じて得たものがある。「切磋琢磨
できる実践の場。みんな応募しようよ」
という浅井さんの言葉が、設計競技か
ら得たものの大きさや魅力を物語って
いるように感じられた。

休日ドボクの魅力

納得できるまで突き詰め、苦労した
からこそ得られた楽しさ。チーム内で議



写真4 東京大学のチームのみなさん(左から浅井さん、有田さん、宮坂さん、山崎さん)

論し審査を受けたからこそ得られた経
験。日常生活では得られない刺激や経
験を求めて取り組む「休日ドボク」には、
参加者を夢中にさせる魅力があった。
さまざまな取り組み方がある「休日
ドボク」。今回は、徳島大学都市デザイ
ン研究室主催の「石積み学校」を取り上
げる。

■2014年は「景観開花。XI」が開催予定。
詳細は「景観開花」実行委員会のページを
参照のよ([http://www.facebook.com/
pages/景観開花/221514421209900/](http://www.facebook.com/pages/景観開花/221514421209900/))。

[取材・執筆]

天野 文子 学生編集委員
飯島 怜 学生編集委員